POPOF
established 1992

No 20

ポポフニュース

2013年6月号

▲ ポポフ 20 周年記念写真

ポポフ（POPOF）はポレポレ基金（Pole Pole Foundation）の略称で、1992 年にコンゴ民主共和国で設立された NGO（非政府・非営利団体）です。ポレポレとは「ぼちぼち」という意味のスワヒリ語で、あせらずゆっくりと運動の輪を広げていこうという気持ちがこめられています。

ポポフの目的は、コンゴ東部にあるカフジ・ビエガ国立公園の周辺で自然環境の保全、絶滅の危機に瀕するヒガシローランドゴリラの保護、地域振興、自然保護教育を実践することにあります。

会員はほとんど国立公園周辺に居住する地元の人々で、調査団を組織して土壌や動植物相の現状を調査したり、自然資源の持続的な利用をはかるように村人たちに呼びかけています。子供たちの年齢に合わせて環境教育のプログラムをつくり、就学前の児童から、大学生、主婦にいたるまでさまざまな教育事業を実施しています。また、国際交流を高めるために観光客に配布するパンフレットや絵はがきをつくり民芸品を販売して、地元でエコツーリズムを推進するための活動をしています。

こういったポポフの活動を支援するために、日本支部ではカフジ・ビエガ国立公園周辺の人々の生活、アート、ヒガシローランドゴリラを題材にした絵はがき、カレンダー、エコバッグを作成して販売し、展示会、講演会を開いて寄付を募り、現地で保護・教育活動や必要な物品を購入する資金にあてています。また、民芸品を作成する技術やアイデア、自然保護教育のための教材を提供したりしています。現地コンゴの政治情勢が思わしくないため日本ではまだポポフの会員を募集するまでに至っていませんが、将来日本からも人材を派遣してより国際的な活動ができるようにしていきたいと思っています。

ポポフニュースは、最近のポポフの活動を紹介し、今までに日本で集められた資金がどのような活動に使われたかを報告するニュースレターです。現地の人々やゴリラの近況についても報告していこうと思います。また、ポポフが創作したポポフ・グッズや絵はがきの販売についても紹介しますので、お知り合いで興味のある方にもぜひ伝えていただきたいと願っています。

活動報告

2012 年

6 月 17 日 ―― **日本学術会議サイエンスカフェ**「ゴリラから見る私たち」 @道玄坂カフェ（東京都渋谷区）

7 月 18 日 ―― **人権大学講座**「動物社会から学ぶ人権〜ゴリラの研究を通して」山極寿一 @ハートピア京都（京都市）

8 月 14 日 ―― **第 24 回国際霊長類学会大会** @カンクン（メキシコ）
FACTORS INFLUENCING LIFE HISTORY STRATEGIES OF EASTERN AND WESTERN LOWLAND GORILLAS. (Yamagiwa J, Ando C, Kahekwa J, Basabose AK). USE OF SWAMP OR RIVERSIDE FOREST BY EASTERN AND WESTERN GORILLAS. (Yamagiwa J, Iwata Y, Basabose AK).

9 月 4 日 ―― **ポポフ創立 20 周年記念祝賀会** @中央科学研究所（コンゴ民主共和国）

10 月 5 日、6 日 ―― **シリーズ映画館で観る狂言ゴリラ楽 2**「ゴリラのおはなし」 @京都シネマ（京都市）

10 月 27 日 ―― **男女共同参画講座ウィングスセミナー**
「頼れるイクジイになる！孫育て講演会」山極寿一 @ウィングス京都（京都市）

10 月 30 日 ―― **法然院森の夜の教室**「チンパンジーとゴリラの対話」松沢哲郎・山極寿一 @法然院（京都市）

11 月 24 日 ―― **同志社教育講演会**
「ゴリラから見た人間の子育てとコミュニケーション」山極寿一 @同志社大学（京都市）

12 月 16 日 ―― **チャイルドトラスト子育て講演会**
「家族進化論ー今、家族は崩壊の危機を迎えているのか！？」山極寿一 @京都キャンパスプラザ（京都市）

2013 年

2 月 9 日 ―― **朝日カルチャーセンター**「ゴリラから見た家族の進化 」山極寿一 @ 朝日カルチャーセンター（大阪市）

3 月 9 日 ―― **世界の和輪話**「コンゴ民主共和国について」バサボセ・カニュニ @ 第四錦林小学校（京都市）

4 月 6 日 ―― **NHK 文化センター講演**「ゴリラに学ぶ社会と人間」山極寿一 @NHK 文化センター（京都市）

4 月 13 日 ―― **日本アフリカ学会創立 50 周年記念市民公開講座**
「アフリカの自然が作った人間」山極寿一 @ 京都大学（京都市）

5 月 18 日 ―― **持続可能な未来への伝言**「おどるゴリラ、しゃべるゴリラ」バサボセ・カニュニ @愛知国際プラザ（名古屋市）

会計報告

収入		支出	
昨年度よりの繰越金	626,723	ニュースレター印刷費	37,065
講演会・シンポジウム　カンパ	125,864	ニュースレター・ホームページ作成費	26,950
展覧会売上	14,500	ポポフグッズ材料費	57,770
作品売上寄付	16,770	郵送費	39,842
ポポフグッズ売上（現金）	386,600	ポポフへ送金	3,272,000
寄付 (現金)	3,845,647	東海ろうきん NGO 説明会出席旅費	10,760
売上・寄付（郵便振替）	1,039,623	次年度へ繰越金	2,611,573
受取利子	233		
計	6,055,960	計	6,055,960

ろうきん東海 NPO 団体等寄付システム、日本グレイトエイプス保護基金、A SEEDJAPAN「ケータイゴリラ」、エネオスクリック募金から、寄付金をいただいています。

ポポフが Whitley 賞を受賞しました

ジョン・カヘークワ

▲ 授賞式でのジョンさん

この 5 月 2 日に、ロンドンで第 20 回 Whitley 賞の授賞式が行われ、POPOF の代表者としてアン王女より記念の盾と賞金 3 万 5 千ポンド（約 500 万円）をいただきました。素晴らしいことです。この栄誉を皆さんといっしょにお祝いしたいと思います。

Whitley 賞は、世界で活躍している特筆すべき草の根的な自然保護の活動とそのリーダーを称えるもので、1994 年に創立されました。これまでに 70 カ国 160 の活動が受賞しています。この財団の理事を務めるデヴィッド・アッテンボロー氏は 20 周年の記念式典に寄せて、「この授賞の意義はおそらく、世界で自然保護に活躍するリーダーたちが受賞によってネットワークを作り、その直面している多様な課題をグローバルなものとして広めることにある」と述べています。今回の受賞によって、ポポフの活動は世界に知られることになり、世界各地で繰り広げられているさまざまな自然保護活動と手を組める可能性が大きく広がりました。これは大変喜ばしいことです。

私の受賞理由として、「ヒガシローランドゴリラの保護とその活動は長く危険なものであった。この亜種を救うために生涯をかけて捧げた彼の活動は決してたやすいものではなかった」と述べられています。ゴリラを対象にしたエコツーリズムは、ウガンダに見られるように、平和なコンゴ民主共和国に貴重な生計の手段をもたらし、保護に貢献してきました。しかし、この 20 年間でヒガシローランドゴリラの数は 80 ～ 90% も減少してしまいました。コンゴ民主共和国は世界でも有数な自然資源の豊富な国なのに、世界で最も貧しい国になってしまいました。この国で自然保護の活動を高めていくには、地域コミュニティの保護に対する意見を聞いて理解し、保護教育のプログラムを企画実践し、自然資源の収奪に代わる持続的利用に基づく経済的発展の手段を講じる必要があります。その実践をポポフに期待したいというのです。

今回の賞は、170 人の候補者の中から 7 人に与えられました。コンゴ民主共和国とカフジ・ビエガ国立公園のヒガシローランドゴリラを代表して受賞し、スピーチをさせていただいたことはとても栄誉なことだと思っています。驚いたことに、イギリスの人々はほとんどコンゴ民主共和国のゴリラについて知りませんでした。アン王女がフランス語で私に 5 分間も話しかけてくださったことにとても感激しました。

ポポフは今、活動を周囲に広げようとしているところです。今までは戦争やその後の政治的、社会的な混乱のために活動の場をカフジ・ビエガ国立公園の高地部に限定してきました。しかし、公園の 9 割は低地部の熱帯雨林にあり、ここでは戦争中に多くの野生動物が密猟などの被害を受けています。まだ組織だった調査が行われていないのでその実態は不明です。カフジ・ビエガ国立公園はヒガシローランドゴリラが最も多く生息している地域で、そのほとんどは低地部で暮しています。早急にその様子を把握し、保護の対策を打たねばなりません。

また、ヒガシローランドゴリラはタンガニーカ湖の西側にそびえるイトンブエ山地、カフジからさらに西方のコンゴ盆地へ下ったマイコ国立公園にも生息しています。これらの地域のゴリラの生息実態を調べ、地域住民と協力して保護活動を展開したいと考えています。一部の地域のゴリラだけでなく、野生のヒガシローランドゴリラたちを丸ごと保護し、人間と共存できるように関係を改善していくのがポポフの目的だからです。

Whitley 賞を受賞したことによって、他の地域でさまざまな保護活動をリードしている仲間ができたのはとても幸運でした。これを生かしてぜひ世界のネットワークに合流し、ポポフの活動を広め、高めていきたいと思います。今後ともぜひ、みなさんのご協力をお願いいたします。

ポポフ 20 周年記念式典

山極寿一

昨年の 9 月 4 日に、ポポフ創立 20 周年の記念集会が開かれました。日本からはポポフ日本支部の山極寿一（京都大学）、SATREPS 地球規模課題対応国際科学技術協力のプロジェクト「野生生物と人間の共生を通じた熱帯林の生物多様性保全」をガボンで実施している竹ノ下祐二（中部学院大学）、藤田志歩（鹿児島大学）、岩田有史（中部学院大学）が参加しました。記念式典はカフジ・ビエガ国立公園のそばにある中央科学研究所のホールで行われました。これまでポポフの活動を支えてきたメンバー、地元の人々、ポポフの経営する幼稚園、小学校、中学校の先生や生徒たち、アートセンターや苗木センターで働く人々、国立公園の保護官や監視員、ゴリラツアーのガイド、ゴリラの集団をモニターしている調査補助員、中央科学研究所の研究員や技術員など多くの人々が集まりました。

まず、地元を代表してムワミと呼ばれる、この地域の伝統的な首長から開会の宣言があり、続いてポポフの代表ジョン・カヘークワがポポフの 20 年の歩みについて述べました。ゴリラツアーのガイドだった彼は、中国製の T シャツにゴリラの顔を描いて観光客に販売することを思いつき、地元の手で観光ビジネスを開始しました。ゴリラの調査をしていた私と協力して、観光のために観察可能になっていた4群のゴリラすべての個体を識別して名前を付けました。そして、シガニー・ウィーバーが主演した「愛は霧のかなたに」という映画の撮影に協力して得たお金を元手にしてポポフ（ポレポレ基金）

▲ 話に聞き入る子供たち

を創設したのです。この映画は、隣国ルワンダの火山国立公園でマウンテンゴリラの研究と保護に生涯を捧げて亡くなったダイアン・フォッシーというアメリカ人女性の物語です。私はフォッシーに師事し、フォッシーがゴリラの保護に熱心なあまり地元民と対立し、それがもとで命を失ったことをよく知っています。そもそもその体験がもとになり、ゴリラの保護には地元の人々の協力が不可欠であることを痛感して、ポポフの創設に協力することになったのです。その後、カフジは内戦状態となり、観光よりも保護と環境教育を推進することに力を入れてきました。

ゴリラとその生息地が脅かされる大きな原因は、貧困と教育の不足です。そのためにまず地元に雇用を作り出し、ゴリラの保護に対する理解を子どもたちの教育を通じて促進する必要があります。ポポフはこれまでに 47 人の元密猟者たちをアートセンターや洋裁、学校の教師として雇用してきました。これまでに 400 万本の苗木を育てて近隣の村々に配り、学校を建設して幼稚園から中学校までの子どもたちの環境教育を実施してきました。アンガ中学校の卒業生は毎年 75 ～100%国家試験に合格して、大学へ進学する資格を得ています。これらの現状をそれぞれの学級の教師が報告し、まだわずかな学費が払えずに学校に通えない子どもたちがいることを訴えました。

続いてカフジ・ビエガ国立公園の代表が、1970 年に設立された国立公園の歴史を述べました。設立当初は地元の人々の生活向上をうたいながら、地元民との衝突が絶えなかったそうです。保護区になったおかげで締め出された人々が多かったからです。監視員に銃で撃たれた人や、逆に命を落とした監視員もいます。長らく公園と地元は敵対していました。ポポフの活動も長くは続かないと思っていたのに、20 年も続き、毎年大きくなっていくのは見ていて驚くほかはないと

▲ 劇を演じる中学生

▲ 詩を朗読する小学生

語り、本来公園側がすべき仕事を担ってもらっていると感謝の言葉を述べました。さらに、ポポフの顧問で現在ゴリラの保護を目的に国際的な NGO で働いているバサボセ・カニュニが、この地域一帯に生息するゴリラと保護の現状について述べました。彼は京都大学で博士の学位をとり、ウガンダ、ルワンダ、コンゴ民主共和国でゴリラの保護活動を実施しています。カフジの人々にとって他の地域の現況を聞くことはとても励みになったのではないかと思います。

私は 1978 年からカフジで調査をしてきましたので、昔のゴリラたちや調査に携わってくれた人々の写真、映像を見せて、われわれ人間の由来を知るためにゴリラという隣人を研究する意義について語りました。30 数年前のゴリラたちはもうほとんど寿命を終えており、亡くなった人々も大勢います。ポポフの活動に関わっている人たちにとってはおじいさんやお父さんに当たる人ばかり。みな昔を思い出して歓声やため息が絶えませんでした。最後に、ガボンのプロジェクトを代表して竹ノ下が現在進行中の研究と保護について語り、ガボンでもポポフと同じような地元中心の NGO を立ち上げたことを報告しました。人口密度の低いガボンではまだゴリラのすむ環境は豊かで、カフジから学んだことを実施していけばきっときっと明るい未来が開けると抱負を述べました。最後に中央科学研究所の所長が、ポポフの活動は自然資源の保全を通じて研究活動に大きな貢献をしてくれていると感謝の言葉を述べ、感謝状をポポフへ贈りました。

それから舞台は一転して子どもたちが主役になり、メッセージを読む幼稚園児、自作の詩を朗読する小学生、密猟と保護を題材にした劇を演じる中学生など、ホールは笑いと拍手に包まれました。その後、ベルギーの植民地時代に建てられた瀟洒なゲストハウスに集合して全員で会食し、待ちきれなくなった女性たちが裏声で歓声を上げるとみんな一斉に踊りだしました。とくに狩猟採集民だったトゥワ人の調査補助員たちは奥さんたちと輪になって、かわるがわる真ん中へ飛び込んでいく伝統的な踊りをいつまでも楽しんでいたのが強く印象に残っています。もちろん私たちもその輪に入りました。

翌日は公園を訪問し、久しぶりにチマヌーカ集団のゴリラたちに会いに行きました。乾季の終わりでゴリラたちは湿地にいて、カヤツリグサを根元から引き抜いて白い髄をおいしそうに食べていました。最近は子どもがたくさん生まれていて、母親の背中に乗って興味深そうに私たちを見る赤ん坊たちがとても印象的でした。彼らが大きくなるころには、もっとこの地が豊かに平和になっていることを願わずにはいられません。

▼ チマヌーカ集団の母親と赤ん坊

カフジにおけるゴリラの近況と調査

バサボセ・カニュニ

1991 年以来、カフジ・ビエガ国立公園では私が所属するコンゴ民主共和国中央科学研究所と京都大学との間で霊長類の生態学的共同研究が行われています。調査地は公園の高地部で、山地林に同所的に生息するゴリラとチンパンジーの種間関係を解明しようとする目的をもっています。とくに、この山地林で両種の類人猿が共存するための社会生態学的要因や生物多様性について大きな関心をもっています。1990 年代中盤から続いている戦争の影響によって、依然として公園の管理はうまくいっていませんが、長期研究は継続されています。現在、調査は以下の 4 つに主眼が置かれています。

・類人猿が食べる植物の部位（果実、花、新葉）の季節変化
・ゴリラとチンパンジーの行動域の変化
・類人猿の寄生虫学と自己治療行動
・ゴリラとチンパンジーの集団の遺伝的構造

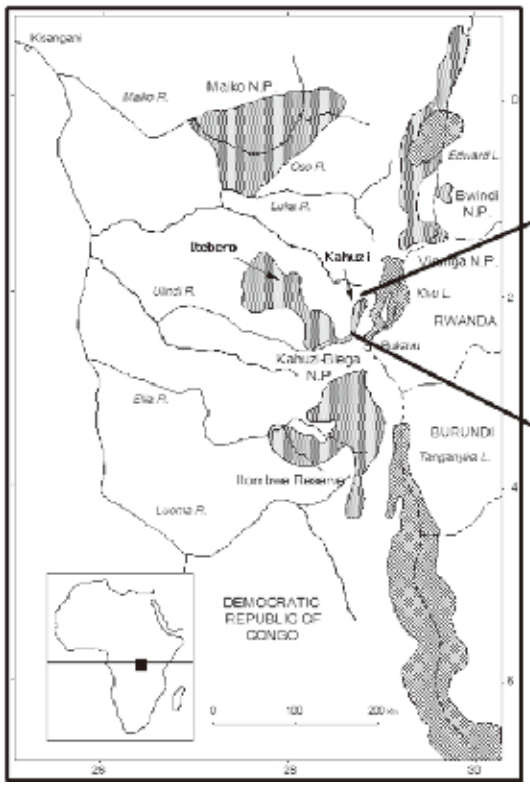
まだ公園内は安全とは言えないので、調査を継続するには危険が伴いますが、優秀なトラッカーを訓練し、質の高いデータを得ることに成功しています。これらの勇気あるトラッカーたちは、半分人付けのできているゴリラの 2 つの集団（ガニャムルメ集団も含まれます）とチンパンジーの 1 集団（カボコ集団）を毎日追跡し、糞や食痕、GPS (Global Positioning System) を用いた遊動コースの記録を行っています。これらの記録には研究者がついている必要はありませんが、私は週に 1 回データのチェックを行って正確に記録できているかどうかを確認し、他の類人猿の調査地と比較できるように統計検定を行っています。

最近、ガニャムルメ集団は 2010 年と 2012 年の行動域から北方へ大きく移動しました。これは近くに 3 頭のゴリラから成る集団がやってきたためだと思います。ガニャムルメ集団は現在シルバーバックのガニャムルメのほかに、7 頭のメス、2 頭の子どもと 3 頭のアカンボウの計 13 頭から成っています。たくさんのメスがいる集団のオスは、メスを誘惑されるのが嫌で、他の集団との接触を避けることがあるのです。ガニャムルメ集団が移動したのもそうした理由からかもしれません。

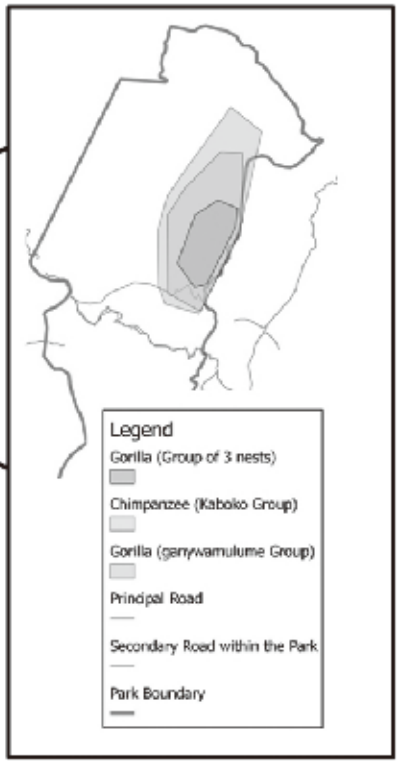
一方、チンパンジーのカボコ集団はこの 10 年間ほとんど行動域を変えていません。果実の豊富な一次林を頻繁にわたり歩き、ガニャムルメ集団とも行動域を大きく重複させています。それでいて、ゴリラとチンパンジーの集団はめったに出会いません。おそらく互いに出会わないように気を付けて進むコースを調整しているのだろうと思います。そうした種間の関係がデータの分析によってつかめるだろうと期待しています。

最近は遺伝情報を用いて、個体の分散や繁殖成績を調べる方法が発達しています。今回私はその方法を学ぶために京都大学に滞在していて、ゴリラやチンパンジーの糞から DNA マーカーを抽出して分析し、ベッドから得た糞を用いて集団の性・年齢構成や血縁関係を調べています。もう少ししたら、面白い結果が得られると思います。

最後に、この困難な時期にもかかわらず私たちの研究支援を続けてくれ、日本での研究機会を与えてくれた京都大学に深く感謝したいと思います。



▲ カフジ・ビエガ国立公園の地図



▲ ゴリラとチンパンジーの行動域

ゴリラの住む森から
持続可能な未来への伝言
～おどるゴリラ？しゃべるゴリラ？～

伏原納知子

2013 年 5 月 18 日　13:30 ～ 16:00
愛知県名古屋市あいち国際プラザ　アイリスルーム
主催 : 愛知県国際交流協会フェアトレード名古屋ネットワーク

名古屋でフェアトレードのお店 風’ s をされている土井さんから要請があり、バサボセさんがコンゴのこと、アフリカのゴリラのこと、ポポフの活動についてお話をしました。
定員が 50 名程のちいさな集まりでしたが、参加者は一方的にお話を聞くだけではない参加型の催しで、参加者の年齢も子どもから年配者まで大変幅広いものでした。参加者は最初にクイズでグループに別れ、グループでゴリラの暮らしを想像して絵を描きます。次にポポフのメンバーで画家のデヴィド・ビシームワが描いた絵本「ゴリラとあかいぼうし」をプロジェクターでの読み聞かせ。そして題名にもある「おどるゴリラ」の登場！です。京都でゴリラの動きを取り入れたゴリラダンスを広めている森岡みきさんの指導で、参加者全員でゴリラダンスを踊りました。東山動物園からやって来た着ぐるみのゴリラちゃんもダンスに参加。平手で胸をたたき、ナックルウオークでボックススッテプを踏むというかなりハードなダンスですが、のせ上手な森岡さんのリードで全員汗だくで「おどるゴリラ」になりました。ゴリラになった後は、

▲ バサボセさんのお話

バサボセさんのお話。画像を見ながら、コンゴ民主共和国について、アフリカのゴリラの生息域や西と東のゴリラについて、コンゴのゴリラを取り巻く状況やポポフの活動について語ってくださいました。ゴリラの住む森と人の畑が接しているため、ゴリラが畑に入って来てトラブルになる。それを防ぐために、森と畑の間にゴリラが食べないコーヒーの木やお茶の木を植えて緩衝帯を作る試みも紹介されました。そこで作ったコーヒーがコンゴのフェアトレードコーヒーとしてイギリスで販売されているそうです。お話の後、参加者は再びグループで、わかったこと、驚いたことを共有。熱心な質問が沢山出ました。とりわけゴリラの森で出る希少金属の採掘がゴリラの生存を脅かし、希少金属は携帯やパソコンに使われ自分たちの生活に繋がっていることが驚きの事実であったようです。参加者には名古屋在住のコンゴの方もおられ、アフリカで活動していた青年協力隊の方たちも交えて多言語入り交じって話は尽きませんでした。

▼ みんなでゴリラダンス

カフジ・ビエガ国立公園でモニターされているゴリラ集団の現在の構成

集団名	シルバーバック	ブラックバック	オトナメス	ワカモノ	コドモ	アカンボウ	合計
	13 歳以上	8-12 歳	8 歳以上	6-8 歳	3-6 歳	0-3 歳	
ムガルカ	1						1
チマヌーカ	1		17	2	6	8	34
ムファンザーラ	1		9	5		4	19
ランガ	1		7		2	2	12
ムプングウェ	1		7			2	10
ガニャムルメ	1		7		2	3	13
マンコト	1	2	13	2		3	21
ナマリディーニ	1		1	2		2	6
チブルーラ	1		7			3	11
グループ 3	1		1	1			3
合計	10	2	69	12	10	27	130

近刊案内

○山極寿一著『**ゴリラは語る**』15 歳の寺子屋 —— 講談社

○山極寿一著『**野生のゴリラと再会する**』—— くもん出版

○中川尚史・友永雅己・山極寿一編『**日本のサル学のあした**』
—— 京都通信社

○牛田一成著『**ゴリラの森でうんちを拾う—腸内細菌学者のフィールドノート**』—— アニマル・メディア社

○河合雅雄著『**学問の冒険**』—— 岩波現代文庫

○草山万兎著『**宮沢賢治の心を読む（II）**』—— 童話屋

○安達千季他編『**ゆとり京大生の大学論**』—— ナカニシヤ出版

○朝倉敏夫編『**火と食**』、食の文化フォーラム 30 —— ドメス出版

○奥野克巳・山口未花子・近藤祉秋著『**人と動物の人類学**』—— 春風社

○いしいしんじ著『**その場小説**』—— 幻冬舎

○關野吉晴対論集『**人類滅亡を避ける道**』—— 東海大学出版会

○佐藤宏明・村上貴弘共編『**パワー・エコロジー**』—— 海遊舎

○河合香吏編『**制度—人類社会の進化**』
—— 東京外国語大学アジア・アフリカ・言語文化研究所

○菅原和孝著『**身体化の人類学**』—— 世界思想社

○永野善子編著『**植民地近代性の国際比較**』—— お茶の水書房

○山本佳奈著『**残された小さな森—タンザニア季節湿地をめぐる住民の対立**』—— 昭和堂

○遠藤聡子著『**パーニュの文化誌—現代西アフリカ女性のファッションが語る独自性**』 —— 昭和堂

○四方篝著『**焼畑の潜在力—アフリカ熱帯雨林の農業生態誌**』— 昭和堂

○羽渕一代・内藤直樹・岩佐光広編著『**メディアのフィールドワーク：アフリカとケータイの未来**』—— 北樹出版

○多摩アフリカセンター少年ケニアの友東京支部共編『**アフリカに暮らして—ガーア、カメルーンの人と日常**』—— 春風社

○京都新聞社編『**日本人の忘れもの**』—— 京都新聞出版センター

○佐倉統著『**「便利」は人を不幸にする**』—— 新潮選書

○ジャン・ハッツフェルド著、ルワンダの学校を支援する会（服部欧右）訳『**隣人が殺人者に変わる時—ルワンダ・ジェノサイド生存者たちの証言**』—— かもがわ出版

○印東道子編『**人類の移動誌**』—— 臨川書店

○ドリアン助川・あべ弘士著『**クロコダイルとイルカ**』「じんじん」
—— 制作委員会

○内田由紀子・竹村幸祐著『**農をつなぐ仕事—普及指導員とコミュニティへの社会心理学的アプローチ**』—— 創森社

○盛口満著『**生き物の描き方**』—— 東京大学出版会

○渡辺守著『**生態学のレッスン–身近な言葉から学ぶ**』— 東京大学出版会

○明和政子著『**まねが育むヒトの心**』—— 岩波ジュニア新書

○平田オリザ著『**わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か**』—— 講談社現代新書

○平田オリザ著『**幕が上がる**』—— 講談社

○鎌田東二著『**古事記ワンダーランド**』—— 角川選書

○奥谷三穂著『**環境・文化・未来創造—学生と共に考える未来社会づくり**』
—— 芙蓉書房出版

○岩槻邦男・仁王以智夫著『**共生する生き物たち**』—— ミネルヴァ書房

○大野哲也著『**旅を生きる人びと—バックパッカーの人類学**』
—— 世界思想社

○遠藤秀紀著『**動物解剖学**』—— 東京大学出版会

○亀崎直樹編『**ウミガメの自然誌—産卵と回遊の生物学**』
—— 東京大学出版会

○ステファン・ブレイク著、西原智昭訳『**知られざる森のゾウ**』
—— 現代図書

○辻村英之著『**農業を買い支える仕組み**』—— 太田出版

催しのご案内

▼△▼△　ゴリラとエコツーリズム展　▼△▼△

日時：6 月 18 日（火）— 23 日（日）12：00 ～ 19：00
場所：堺町画廊　京都市中京区堺町通御池下る（地下鉄　烏丸御池　3 番出口を東へ約 7 分）

お話とポポフ報告会：「ゴリラツアーの過去・現在・未来」
日時：6 月 23 日（日）15：00 ～
参加料：2000 円（コーヒーとゴリラクッキー付き）　※ご予約下さい。

戸田恵美（ポポフ日本支部）
オーグスティン・カニュニ・バサボセ（コンゴ民主共和 国中央科学研究所）
山極寿一（ポポフ日本支部）

ゴリラを観光対象にしてツアーが始まったのはアフリカ 中央部にあるヴィルンガ火山群で、1950 年代の半ばごろです。当時、日本で成功したニホンザル の野猿公園にヒントを得たのがきっかけでした。でも、ゴリラの餌付けは成功せず、やがて 1960 年代の独立紛争のなかで挫折していきました。再びゴリ ラツアーが試みられたのは 1970 年代で、ヴィルンガとコンゴ民主共和国のカフジでそれぞれ独立に始められました。それから 40 年の間に、さまざまな紆余曲折を経て、ゴリラツアーは 世界的に有名になりました。ルワンダでは国を挙げてこの事業に取り組んでいます。ゴリラツアーを新しく立ち上げようとしている国もありま す。そこで、現在ゴリラツアーを実施しているマウンテンゴリラとポポフの活動しているヒガシローランドのツアーを例にとり、エコツーリズ ムの魅力とその問題点について話し合いたいと思います。合わせてこれからゴリラのエコツアーを計画しようとしているガボンのニシローランドゴリラについても話題を広げたいと思っています。ぜひ興味のある方はご参加ください。

ポポフ・グッズ通信販売のお知らせ

ポポフ日本支部では、ポポフの会員が作成したポポフ・グッズを販売して、その売り上げを現地の活動資金に寄付しています。ご協力いただける方は、郵便局で青色の振り込み用紙に口座番号：00810–1–90217、加入者名：ポレポレ基金と記入した上で、ご希望の品名を書き込み、該当する金額をお振り込み下さい。折り返し、グッズをお送りいたします。

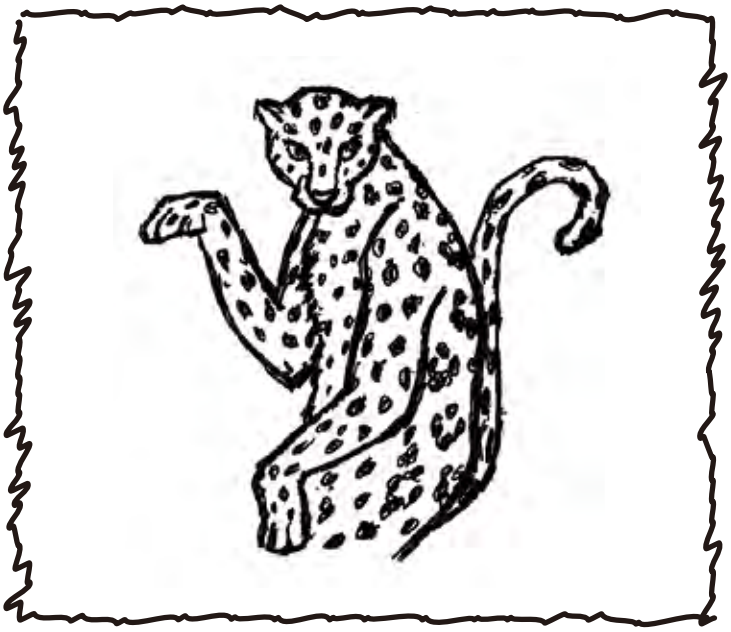
（★は新製品です。）

☆ポポフ絵はがきセット（10 枚組）・・・・・・・・・・・・1000 円
☆ビチブ・ムフンブーカ絵はがきセット（5 枚組）・・・・600 円
☆ヒガシローランドゴリラ・ペンダント・・・・・・・・・2200 円
☆ヒガシローランドゴリラ・キーホルダー・・・・・・・・2200 円
☆どこでもゴリラ・ブローチ（木彫り）・・・・・・・・・3000 円
☆新ケイタイ・ストラップ（白と黒）・・・・・・・・・・2000 円
☆ポポフエコバック・・・・・・・・・・・・・・・・・・1500 円
★ポポフ 2014 年カレンダー（予約販売 11 月頃配布）・・1000 円

絵本『ゴリラとあかいぼうし』の読み方と歌のＣＤ販売について

ダビッド･ビシームワさんの絵による絵本『ゴリラとあかいぼうし』（福音館書店）は、ゴリラの言葉がゴリラ語に近づけた発音のカタカナで書いてあります。このため、読み聞かせをするときに、「どうやって発音したらいいの？」と困る方がたくさんいらっしゃることがわかりました。そこで、なるべくゴリラに近い発音で読んだ声を CD に録音しました。さらに本の末尾に載せてある「ゴリラとあそぼう」という歌を、声とバックミュージックだけのカラオケ調の 2 種類で録音してあります。この CD を作成費と郵送費、それにポポフへのカンパ代 500 円を含め 1000 円で販売します。ご希望の方はポポフ･グッズと同じ要領でご注文ください。折り返し CD を郵送させていただきます。

ガボンの昔話 「チンパンジーの尻が赤いわけ」



ガボンでは夜、火を囲んで家族でお話を聞きます。今から話すお話は、私のおばあさんが話してくれたお話です。このお話は、なぜチンパンジーのお尻は赤いかという話です。

昔々、村では人と全ての動物たちが一緒に暮らしていました。村長は人々の村長でもあり、動物たちの村長でもありました。村長はとても偉く、その命令は絶対でした。

ある日、ヒョウが人の家にやってきました。ヒョウは爪で、その家のお母さんに大けがを負わせ、子どもを連れ去って行きました。そしてその子を、骨も残さず食べてしまいました。ヒョウは子どもを食べる前に、犬とチンパンジーに出あっていました。お母さんは村長の所へ駆け込んで行って、ヒョウが子どもを連れ去ったことを話しました。

村長はすぐにヒョウを呼び、

「子どもをどこへやったんだ」と聞きました。

「川のそばで見かけましたがね。きっと川に落ちたんじゃないですかね」とヒョウは答えました。

村長はチンパンジーを呼んで、子どものことを聞きました。

するとチンパンジーは

「ヒョウが連れて行ったりはしていませんよ。私も川のそばで子どもを見かけたので、川に落ちて死んでしまったのでしょう」といいました。

村長が困っていると、骨をくわえた犬が通りかかりました。犬は村長を呼びとめると

「私は、ヒョウが子どもを連れて行くのを見ましたよ」といいました。

村長は犬を近くに呼び、何を見たのか聞きました。

「私は、人の家のベッドの下に居ました。ヒョウが来て、お母さんを爪で引っ掻き、子どもを連れ去って行きました。それで私はヒョウの後を追ったのです。そしたらヒョウは、子どもを骨も残さず食べてしまいました」といいました。

ヒョウは

「そんなことは嘘だ」と叫びました。

そこで、村長はヒョウの家へ行き、家の中で子どもの血と髪の毛を見つけました。村長はとても怒りました。そして、村中の全てのものを呼び集めて言いました。

「これからは、人がヒョウを見かけたらヒョウを殺すだろう。ヒョウは人を見たら、襲うだろう」

その後、チンパンジーを呼びました。

「お前は何故、嘘をついたのか」

といって、人々の前でチンパンジーの尻をたたきました。村長はとてもとても強くチンパンジーの尻をたたきました。

昔、そういうことがあったので、チンパンジーの尻は赤いのです。

語り：エチエンヌ・アコモ　通訳：安藤智恵子

再話、絵：ふしはらのじこ

このお話は、2010 年国際霊長類学会で来日したガボンとコンゴの方々を招いて開いた「アフリカ人研究者による昔話の語り」(9 月 20 日堺町画 廊)で語られたお話です。コンゴから POPOF のジョン・カヘークワさんとバサボセ・カニュニさんが参加、ガボンからはシメーヌ・ンゼさんとエチエンヌ・アコモさんが参加しました。

● ポポフのホームページ ●

ポポフの活動紹介、カフジ・ビエガ国立公園、ヒガシローランドゴリラ、ポポフ・グッズなどがカラー写真で紹介されている他、今までのニュースレターがすべて閲覧できます。ゴリラの歩く姿がとってもユニークですよ。ポポフのアーチスト、デヴィッド・ビシームワが製作したアートも通信販売しています。ぜひ、一度ご覧下さい。

URL：http://popof-japan.com/blog/

英語版 URL：http://www.polepolefoundation.org/

BLOG：http://www.blog.polepolefoundation.org/

お願い

ポポフの紹介とポポフ・グッズの展示・販売を各地で行いたく思っています。可能な場所と展示を引き受けてくださる方があれば、ご連絡下さい。

連絡先

〒606-8502　京都市左京区北白川追分町

京都大学大学院理学研究科人類進化論研究室　ポポフ日本支部